

いつもの暮らしの持続可能な発展

ながれ

西岡 秀三 (にしおか しゅうぞう／地球環境戦略研究機関 参与)

持続可能な発展時代のキモ

2004年長野の地震で、山古志村から避難生活していた小学生が、TVのインタビューに応じて「早くいつもの暮らしに戻りたい」というのを見た時、そうだこれなんだと悟った。持続可能性のことである。今はコロナ騒動で、政府もこれからの「新しい日常」として、二次元画面経由の人付き合いや、5尺離れ飲み会や、ここは俺に任せると札束切ることを許さぬペイペイ勘定等を推奨している。しかし、これが「日常」になっては残り短い人生、とても楽しく終えられそうもない。いつもの暮らしとは、孫にとってはマスクなしの運動会で2等になること、東京から駆け付けたじいちゃんばあちゃんにとっては、得意げな孫とのハイタッチができ、ご褒美に少々のお札を孫のポケットにねじ込む生活だろう。早くいつもの暮らしに戻りたい。

そういえば、持続可能な発展とは「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」などと難しく定義したブルントラントさんがブループラネット受賞で来日した折、一時間ほどインタビューしたが、話終わったとたん、帰国したら真っ先に会いに行くのだとお孫さんの話をひとしきりして、いつものおばあさんにかえていた。

山古志村でもノルウェーでも、自分たちも孫たちも、いつもの暮らしが続けられるというのが持続可能性のキモのようである。

国民の日常生活から発想する統治

人間社会の損得勘定からくる経済乱変動や戦争がいつもの暮らしを乱す一番の元凶であるが、人間生存基盤である自然環境の変動は、そ

うした元凶の引き金ともなって人々のいつもの暮らしをおびやかす。持続可能な社会をつくるには、“いつもの暮らし”とは何であり、どう維持できるか、暮らしの当事者である生活者の声が統治に反映されねばならない。

ブータン国民総幸福指標 (GNH) は、幸せな気持ち (生活充足度)、健康、時間利用 (仕事、睡眠)、教育、文化の多様性、統治の良さ (政治への参加、うけられるサービス、基本的人権、行政効率)、生態系の多様性と強靱性、生活水準 (収入・資産・居住) の9項目が等価の重みづけがなされた政策チェックリストの好例である。

幸福な生活を支える要素は並んでいるが、どこにも幸福の定義はないし、経済成長も書かれていない。発案した第4代国王は、「国として経済発展は必須だが、それが究極目標でないことは自明である。また『幸福』は主観的で個人差があるから国の方針とはなりえない。むしろ人間にとって最も大切なことは、目的に向かって努力する時、そしてそれが達成された時に誰もが感じる『充足感』を持てること」*とした。5年ごとに国民8,000人 (全人口75万人) に数時間かけてのインタビュー調査が行われ、その結果は国家予算配分とその成果評価に定量的に反映される。日本でも話題になった「時間利用」項目は家事も含む労働時間と健康維持の睡眠時間で計測される。当初余暇時間もあったが、それは他人がとやかく言う事ではなからうと削除されたらしい。筆者は不覚にもティンプーの市場で野犬に咬まれ病院で注射を打ってもらったが、国民も旅行者もすべての治療はタダ (国庫持ち) という事で、良き危機管理統治のありがたさを実感した。

ブータンは今、炭素中立での発展を宣言し、GNH で裏打ちされた発展計画を真剣に考えている。こんなボトムアップの視線でいつもの暮らしに目配りされた脱炭素社会が日本でも作れないものか。

日常生活視点が政策に反映される社会

2019 年末仏マクロン大統領は、くじ引きでフランスの諸側面（地域、職業、年齢など）を代表するように選ばれた 150 人の生活者による「国民気候会合」を開催、週末 6 回を使ってエリゼ宮で熟議させ、移動、消費、住む、働く、食べる、という生活目線での 149 の提言を、なんと行政専門家の指導で法案文案にまで仕立てて提出させた。（例：健康配慮のたばこ広告にならった GHG 多排出製品の広告制限、住宅丸ごと省エネ改修推進と石炭・石油ボイラー禁止など。）提案は 3 件を除き全て、議会での論議にかけるか、すぐできることは行政へおろし、重要事項は国民投票にかけることを大統領は約束している。ほぼ同時期に英国議会も「市民気候議会」を開催し、生活からみた 50 提案を得ている。

脱炭素社会転換には国民一人ひとりの自主的な行動変容が不可欠である。パブコメだけで済ます国民参加ではなく、暮らしの専門家である生活者の熟議された意見が統治に確実に取り上げられる仕掛けが機能している社会がほしい。

気候危機対応からの教訓を生かした社会

CO₂ を出せば地球はあたたまるか？との仮説を検証する大規模実験が人類の住処、地球を材料として百年以上前から始まった。実験は大成功、温度は上がりはじめ、今になって止め方を知らずに始めたことに気づきおろしている状況である。2003 年欧州で数万人が熱中症で倒れ、2020 年豪州の山火事でコアラが逃げまどい、日本で巨大台風が増え続け、温度上昇を止めなければ人間も生態系もなくなりそうというのに、UNFCCC では削減の押

し付け合いが続いている。手探りで構築してきた世界の温暖化危機管理システムは思ったようには機能していない。

これまで 30 年以上の対応から得られた最大の教訓は、時には優しく時には怖い自然との付き合いでは、仕舞い方のメドなしにやたらに目先の経済利益を求めて行動を始めないほうが良いという事だ。

持続可能な世界では nature based solution が不可欠である。すなわち自然科学的知識を人間社会行動に結び付ける間の一貫した共同作業力がある。関連する科学は大きく進んだが、いま「気候危機」までに追い込まれたのは、正しく本質的なことをわかりやすく発信すべき科学者と、理解して行動する側のコミュニケーション不足があったからではないか。さらに、被害を受けながら削減行動せざるを得ない当事者である、個人、企業、地方自治体そして次の世代の人たちに、政府が明確な方向性を示し得なかったし、当事者も指示待ち姿勢で自ら立ち上がらなかつたからではないか。こうした反省を検証し、続く持続可能な社会作りに役立ててもらいたい。

再び持続可能な発展社会へ

いずれ省エネと自然エネルギーを軸とした脱炭素社会はできるだろうが、大切なのはハードウェアではなく、その上にどう充足に満ちた日常生活が続く社会をつくるかである。人類の持続可能な発展とは、経済成長ではない。いつもの生活の発展を言うのである。いつもの暮らしに戻って仲間と遊び学んだ山古志村の少年も、今ではおじいちゃんの知恵に加えた新しい村おこしアイデアで、村のいつもの暮らしを支える大人になり、充足した時間を経ておじいちゃんになる。金目勘定の経済成長ではなく、そうした知恵の受け継ぎと集積こそ人類の成長、持続可能な発展であろう。そんな社会が保証される国をこの際目指してほしいものである。

* 今枝由郎『ブータンに魅せられて』岩波新書